

受講番号 18081 学校名 鏡野中学校 氏名 公文 ひとみ

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 第3学年 生徒数 38名
 科目名 第3学年 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 NEW HORIZON English Course 3 (東京書籍)

クラスの様子・特徴

学年全体としては学習意欲が低く、生活面でも援助の必要な生徒が多い。中でも人懐っこく、反応はよいが、学力的にはしんどい生徒が多いクラスで、アンケート等の協力を得ながら、取り組んでいきたいと思う。

問題の確定

生徒の実態から、「話すこと」と「書くこと」をリンクさせ、両方の力を向上させる取り組みを試していきたい。

予備調査

A 授業の観察

スピーチ原稿作成など英作文に取り組むと、語順が理解できていない品詞がわかっていない語彙が少ないことが明らかになった。

B 生徒による授業評価

順番に話すこと読むことを身につけたいと望んでいる生徒が多く、書くこと話すことを難しいと思っている生徒が多かった。「英語を使って何をしたいか。」という問いに対しては70%の生徒が「英語を話したい(会話)」という結果であった。

C 学力データ

今年4月のCRTの結果から、昨年と対比すると全国比では「聞くこと」が3%、「話すこと」が4%、「読むこと」が3%伸びていた。しかし、「書くこと」においては0.7%しか伸びておらず特に「伝えたい内容を考え正しく書く」の小領域が低かった。

リサーチ・クエスチョン

生徒それぞれが、今より一歩進んだ表現力を身につけるために、苦手な「書くこと」においては、さまざまな助けを借りながらも、内容が豊かで、ある程度の正確さをもった英文を書ける力をつけるためにはどのような指導をすればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

生徒の希望する「話すこと」を向上させるために、簡単な基礎的な会話(問答)文を何度も繰り返し練習すれば、「話すこと」への抵抗が減るのではないかと。また既習の基本文を用いて、ディクテーションを行うことにより、英作文にも幅ができるのではないかと。

実践1

授業の初めにウォームアップとして、日常会話で使われる中学校レベルの英語の応答文を100選び(Q & A 100)一定期間取り組んだ。ペアになりパートナーの言う日本語に対応する英語を1分間にできるだけたくさん言うパートナーの言う疑問文に対する答えをできるだけ長い英文で、1分間にできるだけたくさん言う。という取り組みを実施した。ディクテーションについては今のところ計画が不備で、取り組めていない。

検証1

対象学年は1年次から「Q & A 100」に、期間を区切って毎年取り組んできた。飽きる様子もなく、英語のリズムや疑問文の応答パターンにも慣れ、ALTとの会話にも使っている。また、スピーチや質問文などの英作文にも「Q & A 100」から似ている文型を探し、応用して使っている。単純な繰り返しによる基礎会話文の定着による力は、英作文の基礎となりうると言える。この方法は他学年でも実施され成果が出ているようである。

仮説2

生徒の英作文の間違いを分析すると、語順語彙 文法運用、などの問題が考えられる。このつまずきを克服するには、どこを見れば(調べれば)よいかということ徹底して教え、習慣化すれば、自分で学習する方法がわかり、英作文への苦手意識が少なくなるのではないかと。

実践2

については、あらゆる場面で「主語はどれ? 動詞はどれ?」という問いかけをし、主語と動詞の関係に注目をさせ、主語の人称により動詞の形が変化することを常に、意識させた。は和英辞書をそれぞれのペアに貸しだし、「自分で」調べることができる環境を整え、調べる習慣が付くよう取り組んだ。については教科書の巻末にある、「基本文のまとめ」「基本表現のまとめ」を紹介し、参照するよう呼びかけた。

検証2

学年の初めの頃の英作文の活動では、直接教師やALTにわからない単語などを聞く生徒が多かったが、～を繰り返し指導するうちに自分で調べたり、基本表現から自分が作りたい文に似た文を探したり、応用できる生徒が増えてきた。また、「日本語」から「英文」に変換するとき、日本語では主語が脱落したり、省略されていることに気づき、英文での主語が何なのかを考える生徒が増えてきた。

仮説3

スピーチすることを前提に、タスクを伴った英作文を書いていけば、ある程度の長さの英文が書けるようになるのではないかと。また繰り返し練習した後、発表することにより、「話すこと」への自信もついていくのではないかと。

実践3

「show&tell」「日本文化紹介」「スキット」「ディベート」「レポート」などの課題に個人・グループ・ペアの形態を使って「書くこと」から「話すこと」へとつながる取り組みを行った。個人別になると、長さや内容の深まりに差ができてくるが、タスク(新出文型を導入するなど)を与えながらグループやペアで英作文に取り組ませた。また評価も教師側からの評価と生徒相互の評価も入れた。

検証3

学年の初めに行った「show&tell」から比べると現在取り組んでいる「レポート」の内容は格段にレベルアップしたと言える。タスク自体も難解になったが、生徒自身の「表現したいこと」と「表現できる英文」に格差がなくなってきたのだと思う。「話すこと(発表)」を前提に取り組むので、「自分が言えて、仲間が理解できる英文」をめざすようになり、日本語レベルでの言い換えや文法事項の平易化ができる生徒が増えた。

研究の成果

「書くこと」と「話すこと」両方の向上をめざすのは欲張りで、困難であると思われたが、生徒にとっては「書いて」表現したものは「話して」表現したくなるようで、反対に「書くこと」だけを求めた取り組みには、物足りなさを感じていたようである。それぞれの生徒間に表現能力や文法の運用能力の習熟に差はあるかも知れないが、4月から比べると各々の生徒の表現能力はアップし、格調高い文が書けるようになった。語順についてもかなり意識して書けるようになってきた。また文の長さもタスクを設けたということもあるが、接続詞を用いたりして工夫が見られるようになった。

今後の授業改善の課題

相手に伝えるためには、ただ英文を読む(言う)のではなく、「英語らしく」読む(言う)ことの大切さを今回の取り組みを通して痛感した。せっかく内容が豊かな文が書いていても棒読みでは伝わるものも伝わらない。書かれた内容は良くて相手に伝わるような話し方ができないと、ALTにも理解できていないという実状がみられた。相手に理解できるような英語での表現力をどのようにつけるかが今後の課題である。